

「アメリカの遺産—絵画の150年」展 (山口県立美術館) をもとにした鑑賞指導の試み

— 5つの学習指導計画 —

岡田匡史*・静屋智**・尾瀬正美***・弘中小百合****・町田清子****・山本恵****

Five Teaching Programmes for Art Appreciation Based on the Exhibition,
“A Nation’s Legacy: 150 Years of American Art from Ohio Collections”
at The Yamaguchi Prefectural Museum of Art
Masashi OKADA, Satoru SHIZUYA, Masami OGATA,
Sayuri HIRONAKA, Kiyoko MACHIDA and Megumi YAMAMOTO
(Received November 30, 1992)

キーワード: 表現と鑑賞、鑑賞指導の独立、美術と人間との関わり、国際理解、「アメリカの遺産—絵画の150年」展(山口県立美術館)、地域のコレクションや展覧会をもとにした鑑賞授業、鑑賞題材の開発、鑑賞の学習指導案、学校教育と美術館活動との連携、鑑賞教育プロジェクト

1 序

学習指導要領改訂によって図画工作科・美術科では鑑賞領域の比重が増した。中でも小学校高学年での前進は注目に値する。従来、鑑賞は表現に付随し表現を補足するという性格が強かったが、新小学校学習指導要領ではこの点が改善された。以下は、学習指導要領の鑑賞指導に関する記述である。

「第5学年及び第6学年においては、指導の効果を高めるため必要がある場合には、鑑賞の指導を独立して行うようにすること。」

また、美術科も鑑賞指導を重視する方向にある。新中学校学習指導要領では鑑賞教育を国際理解教育として位置づける観点が示された。作品鑑賞のレベルにとどまらず、鑑賞を諸外国の文化・歴史・社会等を学習する活動だと捉える観点は重要である。学習指導要領には第2・3学年の鑑賞に関して次の記述がある。

「美術と人間とのかかわりに関心を持ち、時代、民族、風土、作者などの相違による美術のよさや美しさを味わい、美術が国際理解や親善に果たす役割についても理解すること。」

「美術科教育特論演習Ⅱ」ではこうした動向を鑑み、鑑賞の重要性を認識して、本年度

* 山口大学教育学部

** 山口大学大学院教育学研究科・山口大学教育学部附属山口小学校

*** 山口大学大学院教育学研究科・山口県豊浦郡豊北町立豊北第一中学校

**** 山口大学大学院教育学研究科

は鑑賞教育を授業の主題にした。授業では講読文献として“art education”誌掲載の“Instructional Resources”と題された鑑賞題材を取り上げることにした。「スタイルの重要性—多様なアプローチ(1990年3月号 [vol.43 no.2], pp.25-32.)」と「20世紀美術—表現の問題(1990年5月号 [vol.43 no.3], pp.25-40.)」の2篇を講読し、アメリカで行われている鑑賞指導を学習した。前者はミネアポリス美術大学教育学部スタッフによって、後者はナショナル・ギャラリー指導計画教育課スタッフによって、どちらも所属機関のコレクションをもとに書かれたものである。

この点は授業者・受講生全員にとって興味深かった。鑑賞指導と言うと教科書・図録・スライド等の利用が頭に浮かぶが、地域のコレクションをもとに自前の鑑賞題材を開発し、本物を鑑賞する授業を実施するのが最も好ましい。そこで、上記資料を参照しながら、地域の美術館・画廊・研究教育機関等が所蔵する作品や、そこで開催される展覧会をもとにした鑑賞授業の意義・可能性を検討し、丁度その時期、山口県立美術館でスタートした「アメリカの遺産—絵画の150年」展（5月12日～6月21日）をもとに鑑賞の学習指導案を書くことにした。

本稿はその課題をまとめたものであり、①展覧会の感想、②題材の考察、③学習指導案の3部で構成される。学習指導案は各々の観点で自由に書かれた。各内容の概略は次の通りである。

①静屋: 風景画・現代版画の2つの表現範疇を設けての作品鑑賞

②尾潟: ジャスパー・ジョーンズのクロスハッチング手法の謎解きを柱とする現代美術の鑑賞

③弘中: 具象・抽象の2種の絵画表現の鑑賞

④町田: アメリカ絵画の通史的鑑賞

⑤山本: 国際理解の観点を導入したアメリカ美術の鑑賞

対象学年は、静屋が小学校第6学年、尾潟・弘中・町田が中学校第1学年、山本が同第2学年である。静屋・町田・山本は美術館での展覧会鑑賞が実現できる場合を前提に、尾潟・弘中はそれが無理な場合を前提に題材を構想した。なお、静屋はここに掲げた題材構想図をもとに、山口大学教育学部附属山口小学校第6学年1・2組を対象に、a.事前授業、b.美術館での団体鑑賞、c.事後授業というシリーズの鑑賞授業を行った（V章参照）。

II 「アメリカの遺産—絵画の150年」展を鑑賞して

1. 感想1: 静屋智

この展覧会が山口県立美術館にやってくると聞いたときから、ずっと楽しみにしていた。と言うのも、これまでこのような企画の展覧会はほとんどなく貴重な鑑賞の機会であり、また、自分が興味をもっている現代版画家たちの作品に出会えるという期待があったからである。

合計3回展覧会を鑑賞したが、「アメリカの遺産—絵画の150年」と題された展覧会であるだけに、作品が多様でその点にまず感動した。それぞれの時代を歩んできた作者の足跡とともに、アメリカの発展の歴史がそこに現れてきているような気がした。19世紀の風景画・静物画などにはヨーロッパからの影響が感じられるが、雄大な自然を主題にした作品や、人物や家屋を描いた風俗画にはいかにもアメリカ的な印象を受けるものが少なかった。20世紀に入ってから作品には、作品の様式よりも内容に重点が置かれると同時

に、アメリカ的なモダニズムを感じさせるものが多かった。1920年代、30年代、40年代と経済・政治に影響されてきたアメリカの芸術は、50年代、60年代にポップ・アート、ミニマル・アートなどに形を変えてくる。

最も興味深かったのは、やはり版画作品である。メアリー・カサット「化粧」は1891年頃のドライポイントの作品であるが、複合技法を用い、線と色使いに日本の浮世絵の影響が感じられた。彼女はパリに若くして渡り、フランス印象派の影響を受けたのだが、そのことが如実に感じられる作品であった。

1960年代以降の版画は、シルクスクリーン3点、リトグラフ3点、エッチング2点、木版・リトグラフ併用1点の合計9点であったが、中でもジャスパー・ジョーンズ「薄雪Ⅰ」に魅せられた。クロスハッチングによる画面構成には洗練された感じがあり、シルクスクリーンとは思えないインクの透明感と見事な刷りの技法に、作者と刷り師の完全なものへのこだわりとそれをつくり出すときの一体感が感じられた。サイ・トゥオンブリー「古代ローマの記号」では、絵の具やクレヨンの使い方の面白さと同時に、オリジナルな抽象的な様式のすばらしさを感じた。スーザン・ローゼンバーグ「馬上槍試合」は、木版とリトグラフの版の特徴を見事に生かした力強い作品であった。

鑑賞者の1人1人は感じ方や好みが違うし、同一人物でもいろいろな表現様式に興味があることだろう。この展覧会はどんな鑑賞者の感性をも心地よく刺激できるほどバラエティに富み、秀逸な作品が多かったと思う。日本の絵画の場合は果たして何年展になるのであろうか。その歩みをこのような展覧会を企画することで展望することができるならば「日本ではもちろん、諸外国でも莫大な人気を得るのでは…」と考えたのは私だけであつたらうか。

2.感想2: 尾湯正美

山口県立美術館で事前に1回、鑑賞授業で1回の計2回鑑賞した。個人的に興味があった作品と山口大学教育学部附属山口小学校の子どもたちが興味をもった作品は当然ながら違っていた。当り前のことだが、彼らの多くはまるで本物みたいに描かれている作品、例えばお金の描いてあるヴィクター・デブロイの「本物?」、セヴェリン・ローズンの「果物の静物」、アルバート・ピアスタットの「風景」などを気に入っていたようだ。

展覧会の感想を言う前に、こんなアメリカの作家や作品があつたのかという驚きとそれらを知らなかった恥ずかしさの両方が込み上げてきたことを正直に記しておきたい。現代的な作家については各種の展覧会や作品集などである程度は分かっていたのだが、それ以前の作家については作品に接する機会が稀有だったためほとんど知らなかった。また、作家についてだけでなくこのような展覧会がどうして可能だったのかにも興味があつた。図録によれば、1979年以来、100社以上の日本の企業がオハイオ州に拠点を定め、経済の発展に貢献しているという特別な関係があり、この企画が国際的パートナーである日本との友好の発展に寄与できると評価された。展覧会はオハイオ芸術協会が協会の国際美術交流活動である“アート2000”の一環として実現された。また、オハイオ州は強力な美術館ネットワークをもつと同時に個人・企業のコレクションにも大変恵まれている。4年以上の歳月をかけて多くの人や企業の協力のもとにオハイオ州の貴重なコレクションを紹介するプラン作りが進められた。

私たちは現在、いつでも美術館やデパートの展示場などで外国の美術作品に接することができるという恵まれた環境の中にいるのではないだろうか（もちろん地域によっては不

可能なこともあるが)。作品鑑賞の機会が増えても、ただ単に美術館に行って作品を見ておしまいでは寂しい気がする。作品を鑑賞すること以外になにかあるのではないか。私たちの日々の生活になんらかの形で作家や作品の考え方が関わり、それが地下水脈のように絶えず流れていくとよいと思った。私たちに毎日影響し続けるといったものではなく、「ああそうか」、「そんなもんかなあ」となにか気がつけばそれでいいと思う。また、今までの美術館だったら、「メモは取ってはいけません」、「写真は撮ってはいけません」、「大きな声で話しながら歩いてはいけません」、「静かに見てください」、「作品に触ってはいけません」、「作品に近づき過ぎてはいけません」などの注意事項が多く、まるで監視されているといった感じが強かったのは否定できないだろう。もちろん公共の場だし、かけがえのない芸術作品になにかあってはいけないということは頭では理解していてもなにかもやもやしたものが残っていた。これは美術館に行って作品を見させていたということなのだろうか。それでは教育環境としての開かれた美術館にはなりえない。その意味では今回の附属山口小学校の鑑賞活動に対する山口県立美術館の対応はよかったと思う。美術館の協力のもとに授業として活動が十分に成立していたと思う。見る側と見せる側のコンビネーションがよくなければこうはうまく行かなかっただろうと思う。

展覧会を見て全体としてはよくできた展示構成だと感じた。最初にも述べたように、今まで余り知らなかった（と言うよりも知ろうとしなかった）作家の作品が時代順に紹介してあるのが特徴だった。ただ、アメリカの現代美術とのつながりが少し弱いのはなぜだろうか。私の理解に問題があるのだろうが、アメリカの現代美術以前は私個人にとって知らない対象だということから非常に新鮮に見えた。それに対して、現代美術はこんな作家がいて、こんな作品があるなどと、ある程度作家のことや作品についての生半可な知識が頭に入っているので新鮮さに欠けて見えたのだろう。それと、（欲張った考えだが）1980年代後半の作品がもう少し欲しいと思う。一般の鑑賞者にとってはこの企画で150年の流れが読み取りやすかったかも知れない。子どもたちの鑑賞の様子を見ていてそう思った。

個人的に一番興味のあったのはジャスパー・ジョーンズである。昔から好きな作家の1人であり、実のところ他のアメリカの作家はどうでもよかった。「薄雪Ⅰ」を見て何人の人がこの作品のよさを理解できただろうか。理解というよりも感覚的に気に入ることができただろうか。この一見無造作に置かれているクロスハッチングについてなにか気がついた人があるのだろうか。実は私は最初分からなかった。2回目に行ったとき、斜めの淡い帯に気がついた。なるほど、この淡いグラデーションが雪のイメージを出しているのかと思ったが、このときはまだこの作品がシルクスクリーンの技法として高度であるということしか分からなかった。しかし、この「薄雪Ⅰ」は表現の謎解きについてなにかを語りかけていたのである。その謎解きについては次章で詳述する。

3.感想3: 弘中小百合

この展覧会を観て、一番最初に感じたことは、私のイメージしていたものと違い、余りにヨーロッパ絵画的だったということだ。ずっと並ぶ風景画や人物画は、とても今のアメリカ絵画には結びつけて考えられなかった。

初期の頃の風景画や人物画は、とても明るく活気に満ちている作品が多いと思った。なにか、これからの未来への、明るい希望や期待が感じられる。また、とことんリアリズムを追求したものもあり、楽しく観ることができた。そうした表現に、アメリカ的なユーモ

アが顔を覗かせているように思えた。

現代の作品に来て、版画やその他のものを観ると、ダイナミックなものが多く、いわゆるアメリカ的な雰囲気を見せられたように思った。現代の作品からは、アメリカ独自の個性の誕生を感じさせられた。

私自身は、現代のアメリカ絵画の方に、より興味をそそられるが、このように、アメリカ絵画を歴史の流れに沿って観ることで、ヨーロッパからアメリカに移民してきた人々は、最初はやはりヨーロッパ的な絵画を描いていたことが理解できた。そして、長い歴史を経て、今の、一般にアメリカ的と言われるものを、生み出してきたのだということが分かった。このように歴史的な流れに沿って、絵画を観ることは余りなかったので、とても新しい気持ちで観ることができた。これからはアメリカ絵画だけでなく、さまざまな絵画の歴史も観ていきたいと思った。そうすることで、また新しい絵画の観方ができるのではないかと思う。

4.感想4: 町田清子

この展覧会を観たとき、まずその膨大な量に驚きました。そこには、アメリカの150年間の歴史があり、アメリカ美術の豊かで多彩な姿を観ることができました。展覧会は、「19世紀中期—ハドソン・リヴァー派、アメリカ風景の発見」、「19世紀後期—写実絵画の確立とヨーロッパ美術へのまなざし」、「初期モダニストの時代—新しいイリアリズムとモダニズムの衝撃」、「20世紀中期—具象絵画の展開と抽象表現主義」、そして、「アメリカ現代美術—ポップ・アートの登場、多様な現代へ」(図録『アメリカの遺産—絵画の150年』[山口県立美術館他編集、朝日新聞社、1992年]参照)と年代を追って構成され、それらを通覧することでそれぞれの時代を反映しながらアメリカの美術は展開してきているように感じました。

アメリカ美術と言うと、現代のポップ・アート等がすぐにイメージされますが、150年前の絵画となるとなかなかイメージできませんでした。実際に観てみると、20世紀初期までのアメリカ美術はアメリカ的テーマを備えた作風を展開させようとしています。どこかヨーロッパ美術の模倣のように見えました。しかし、1930年代の大恐慌によりアメリカの美術家たちは次第に変化してきます。彼らはパリの影響と「イズム」を脱し、自らのルーツへと回帰します。「アメリカン・シーンの画家たちは芸術的信条からではなく、素朴なアメリカ的価値観に立脚して作品の強さと発想源を引き出した(前掲図録p.102.)」のです。そういうふうにして次第にアメリカの美術は独自のアメリカ的なものへと変化してきました。

さらに1940年代、世界大戦により多くのヨーロッパの作家がアメリカに逃れてきました。このことによりアメリカ文化は刺激され、変化し、新しいアメリカ美術が誕生することになります。アメリカ美術は最初はヨーロッパの模倣に近いものでしたが次第にアメリカ独自の創造へと発展し、新たな展開をしてきたのだと感じました。アメリカ美術はアメリカ文化の複雑で動きの激しい性質を反映しながら、現代美術へと発展してきています。

この150年展を振り返ってみると、美術というのは時代の移り変わりの様子を鏡のように映し出し、また、いろんな人々の思考によって表現方法が多様に変化し発展してきたことが分かりました。自分の表現したいものを実現するために、それに一番合っている方法・素材を試行錯誤しながら発見し獲得しようとする、そういうことがとても大切になってくるのでは、と思いました。

5.感想5: 山本恵

1992年5月12日～6月21日、山口県立美術館において、「アメリカの遺産—絵画の150年」展が開催された。集められた作品はジョシュア・テイラーの「美術としてのアメリカ」展のように、開拓期のものから現代美術まで多岐にわたり、展覧会は著名・無名の作家の多様な作品で構成されていた。

展覧会場ですぐ目に入るのが19世紀中期のハドソン・リヴァー派の風景画である。それは、写実的力量に富むもので「ヨーロッパ美術」といった感じが強かった。ただ、描かれた題材がヨーロッパ人が初めて目にした、人の手に侵されていない無垢の自然の景観であり、それがアメリカを感じさせる唯一と言ってよい特徴であった。自然の驚異と、美しさ、荘厳さに満ちるこの頃の作品は、“「アメリカに来たヨーロッパ人」が描いた絵”であるという印象をもたせる。

作品はやがて19世紀後期のものへ移行する。この時期にはさらにしっかりとした写実的要素を根底にもつ作品が展開されていき、無我夢中な中にも安定が見えはじめた庶民の生活が感じられる。メアリー・カサットの「子どもをあやすスーザンNo1」やジョン・シンガー・サージェントの「テレサ・ゴス」、エドワード・ポットハストの「風船売り」などにヨーロッパの雰囲気を感じる一方、作品の中になにか伸び伸びしたものがある気がした。それは、約束されたものなどなにもない新大陸でそれでも明日を信じて時には情熱的に、時には野望に満ちて、土地や生活を開拓し続けるアメリカ人らしい楽観的な気質を作品が表現していたからかも知れない。

初期モダニストの時代になってくると描かれる対象にも、画面の空気にも「ゆとり」を感じるようになった。作品の主題に産業や商業の加速的発達を見ることができるようになる。そして、増えはじめた抽象的な作品にはキュビズムの影響が認められることなどから、彼らの目はアメリカ国内だけではなく、外の世界にも向けられていたということが分かる。

20世紀中期の絵画へ進んでいくと、ベン・シャーンの「外を見ている内側」やエドワード・ホッパーの「朝日」などのようになにか“すかつ”としたものが感じられる作品に出会えた。第1次世界大戦中の輸出増による好景気、その後訪れる大不況（そして、家族崩壊の拡がり）、第2次世界大戦による景気の再度の上昇など、時代の動きに翻弄された人々の疲れ、都会に生きる孤独などがこれらの作品には反映されているように思う。抽象表現を用いた絵画が多くなり、なんだか面白さを感じたり、どきっとさせられたりするのもこの時期の特徴だろう。ミルトン・エイヴリーの「赤ん坊」など、とても私の感性にはないものだ。可愛らしくて仕方がないはずの赤ん坊がこんなになってしまうなんて！

やがてアメリカ現代美術の領域に入ってくると、発想の面白さが感じられるようになる。この時期の作品は、「こういう芸術もあるんだなあ」とか、「これは一体なにが言いたいのだろうか」とか「なんのためにこういうことをしたのだろうか」といった感想を抱かせる。「なんのために」ではなく、作家自身が「こんなことをしたら面白いかも知れない」といった感じで楽しんで制作したような、そんな作品が多いと感じた。

絵画の中にはそれぞれの時代の特徴が息衝いている。この展覧会を時代を追って見ていくうちに、これはアメリカ人の歴史そのものなのと思った。著名作家の作品はあったが、絵画史上重要だと認識されている「名画」は余り見られなかったように思う。しかし、新しい世界に移り住み、さまざまなものをよその世界から吸収しながらいつしか自分たちの国“アメリカ”を建設した彼らの150年を見ることができた。アメリカ人は自分の国と祖先

に大いなる誇りをもっていると聞く。自分の祖先がどこからやってきて、自分にはどこの国の“血”が何%入っているかが重大な関心事であるらしい。そんなことを思いながら、自分の生まれた国“日本”についてほんやりと考えた。

III 学習指導案作成にあたって（題材の考察）

1. 「山口県立美術館からのメッセージ」： 静屋智

「我が国及び諸外国の親しみのある美術作品などのよさや美しさなどに関心をもって鑑賞すること。」これは新学習指導要領の第6学年・鑑賞の内容(1)アの文言である。今回の指導要領改訂では鑑賞に関する具体事項の1つとして「鑑賞の適切な指導を重視する」ことが挙げられている。これまで鑑賞の指導は表現の発想や技法などのヒントになることに視点が置かれがちであったが、本来の思いのままに味わう主体的な鑑賞活動が見直され、指導要領では高学年では鑑賞の指導を独立して行うことも必要であるとしている。

鑑賞の指導を充実するには実物の鑑賞が一番よいことは言うまでもないが、そのような授業を実際に行うのはかなり難しい。しかし、今回願ってもない機会が訪れた。「アメリカの遺産—絵画の150年」展が山口で開催されることになり、この展覧会をもとに鑑賞の授業を試みるのが可能になった。授業構想を練るために鑑賞に出かけた。作品数は120点、アメリカの絵画の19世紀から現代までの歩みがよく分かるように工夫されていたが、6年生の子どもたちがいきなり鑑賞に臨んでも「諸外国の美術品を見る」だけで「親しむ」ことはできないのではないかと、それゆえ、十分な成果を得られないのではないかと危惧を抱いた。そこで、事前に2時間の鑑賞の授業を行い、その後で美術館での2時間の展覧会の鑑賞、そして、事後に1時間のまとめの授業をしようと考えた。一番配慮すべきところは、やはり事前の2時間の授業においてなにを取り上げるかであり、授業を通じて子どもたちの心の中に「本物の作品を見てみたい」という期待感・切実感が湧き起らなければならない。そこで、事前の2時間の授業においては6年生の児童のレディネスを考慮して、「風景画について」と「版画について」の2つの範疇を設けて作品を取り上げることにした。

(1) 風景画について

6年生の絵で表す題材に「遠近を表す」というのがある。自分たちの生活の中の身近な風景を見つめ直し、新たな感動を表すのであるが、実際に見たり描いたりしたことがある風景は興味のあるものと考えられる。1時間の授業の導入では児童の描いた風景画を提示し、続いて展示作品の中から3タイプの風景画を選んで鑑賞させることにした。1つ目はピアスタット作「風景（油彩、写實的、構想画的、制作年不詳）」（図1）、2つ目はシリーズ作「白い家（水彩、具象的、1916年頃）」（図2）、3つ目はローソン作「インウッドからのハドソンの眺め（油彩、具象的、画面構成とマティエールに特徴、制作年不詳）」（図3）。3点とも複製画がないため、拡大カラーコピーとスライドを用意し、それらを鑑賞することで少しでも多くの発見ができるようにしたい。

(2) 版画について

120点の中には、版画が10点含まれている。しかもポップ・アートなどの比較的新しい作品がほとんどである。事前の学習なしでは、児童がそれを版画と気づくことや作品の価値やよさに気づくことは無理であろうと思われた。そこで、リトグラフ:サイ・トゥオンブリー作「古代ローマの記号(1970年)」（図4）、シルクスクリーン:ジャスパー・ジョー

ンズ作「薄雪 I (1981年)」(図5)、アンディ・ウォーホル作「マリリン(1967年)」(図6)、木版:スーザン・ローゼンバーグ作「馬上槍試合(1986年)」(図7)といった違う版種の作品を風景画のときと同じような手法で提示することにした。版画を取り上げたのは、児童が紙版画や木版画の製版・刷りを経験しその難しさや喜びを体験しているからであり、また、現代美術の動向の1つに触れ、表現の多様性を感じることができるためである。教師自身が版画を制作してきていることも版画を取り上げた理由の1つである。版画のよさや制作の苦労を具体的に伝えたり、本物の版を見せて表現のすばらしさを体感させたりすることができると考えた。この授業を通して版画に対する認識が新しくなるとともに、主体的な見方が育つようにしたい。



図1 アルバート・ピアスタット「風景」制作年不詳、油彩/カンヴァス 70.5×100.3cm (全写真図版を収録『アメリカの遺産—絵画の150年』〔山口県立美術館他編集、朝日新聞社、1992年〕から転載)

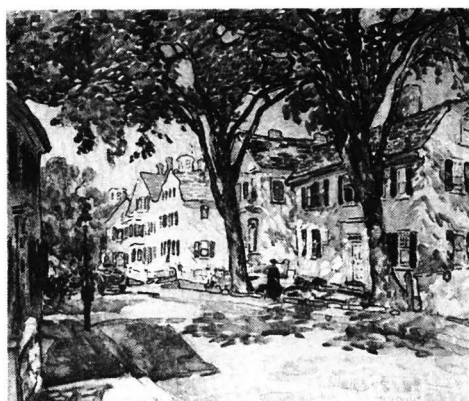


図2 アリス・シリー「白い家」1916年頃、水彩 44.4×52.0cm

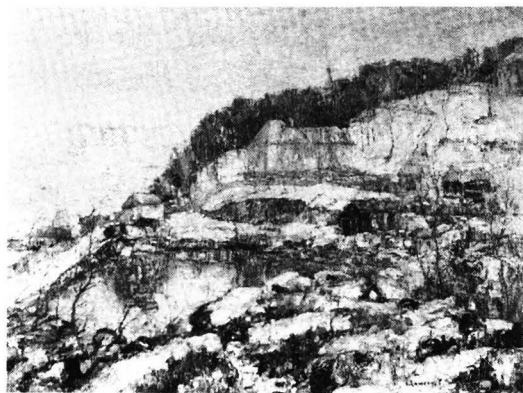


図3 アーネスト・ローソン「インウッドからのハドソンの眺め」制作年不詳、油彩/カンヴァス 76.2×101.6cm

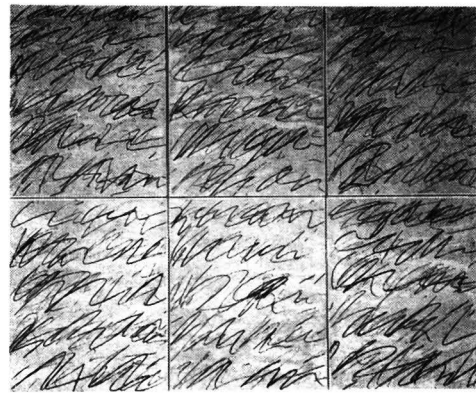


図4 サイ・トゥオンブリー「古代ローマの記号」1970年、リトグラフ 各87.0×69.8cm

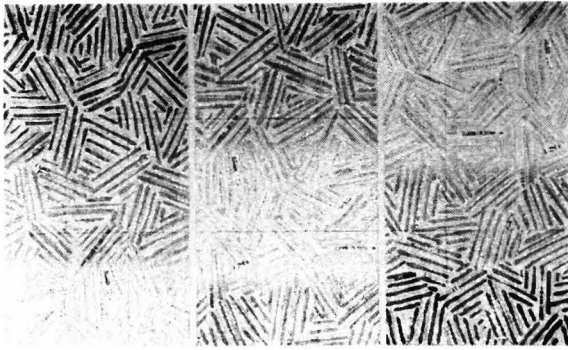


図5 ジャスパー・ジョーンズ「薄雪Ⅰ」1981年、シルクスクリーン／紙 69.8×115.6cm

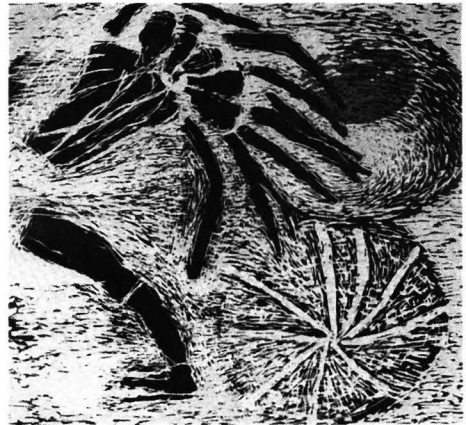


図7 スーザン・ローゼンバーグ「馬上槍試合」木版、リトグラフ／紙 116.2×126.3cm



図6 アンディ・ウォーホル「マリリン」1967年、シルクスクリーン 各91.4×91.4cm

2. 「アメリカ絵画150年とジャスパー・ジョーンズ」： 尾湯正美

この山口県立美術館で開催されている展覧会を通して授業を仕組むにはいろいろな面で困難な点が考えられる。本物の作品を鑑賞しようと思っても学校のある場所が山口から余りにも遠い場合には、学校行事の一環として1日見学旅行を設定するなどしないと授業が実現できない。また、展覧会の時期の問題も起こってくる。学校の教師の引率のもとに作品鑑賞ができる学校は限られてくることになる。本物の作品との出会いの感動はすばらしいが今は現実的なことを考えてみることにする。どんな学校でも共通してできることは学校で展覧会に出品されている作品やその作家を中心にした鑑賞の授業をすることだろう。授業の枠の中で教師の思いを入れながら内容を自由に構成できる。その指導の結果、この展覧会に興味関心をもった生徒が出てきてその中の1人でも家族とともに山口の美術館まで行くことになったらいいのではないか。アメリカの絵画の流れを学習したことによって絵画により興味をもつ者が出てきたり、開拓時代のことに興味湧き起こったり、現代美術をやってみたいと思う者が出てきたりしたらなんと楽しいことかと思う。なにかやってみたいという気持ちを起こさせる、そんな鑑賞の授業を考えてみたい。

この展覧会のポイントは、作品鑑賞を通して20世紀中期からアメリカ現代美術までの時期とそれ以前の時期の意識の違いや歴史の流れを読み取ることだろう。絵画でも立体でも見て分かりやすい作品と分かりにくい作品とがある。分かりやすい代表的具象的な作品と

言えませんがヨーロッパの印象派のような作品が頭に浮かび、逆に分かりにくいのは抽象的作品や現代美術の作品（または、行為）だろう。とかく分かりにくいとされがちな現代美術をジャスパー・ジョーンズの作品を通じて考えてみようと思った。彼の作品には仕掛けがある。この仕掛けを読み取ることによってアメリカの現代美術の一面を理解させたいと思う。

中村敬治氏がジョーンズの作品について次のように書いている。

「初期の作品では現実の相似が画面に入り込むことで、画面そのものも現実の鏡像となっていた。最近の作品では、むしろ現実との照応を遮断した純粋な画面の中で、実像と鏡像との関係が抽象的に追求されているといえるかもしれない（中村敬治「ジョーンズの臭跡」 [『美術手帖 [特集] ジャスパー・ジョーンズ vol.30 no.438 1978年9月号] 所収、美術出版社jpp.126-127.)。』

クロスハッチングの絵画は、平面的なパターンを平面的に描くという点では従来の表現方法と変わりがないのだが、星条旗のパターンのような対応する現実的事象がないので抽象的に見える。今回の鑑賞作品「薄雪Ⅰ」（図5）を特徴づけるクロスハッチングという連続模様に近いモチーフはどこから出てきたのだろうか。それは彼の日常の視覚的体験から出てきたものだった。彼はこう語っている。

「週末でハンプトンズへ行こうと車を走らせていて、反対方向からきた車とすれちがったとき、その車があんなふう塗りに塗られていたのです。しかし、それを見たのは一瞬で、対向車は行ってしまい、本当にちらっと見ただけでした。しかし、ほくはすぐに、これを次の絵に使おうと思ったのです（東野芳明「ジョーンズの近作あるいは「旗」から「敷石」へ」 [同誌] p.106.より重引)。」

それは彼が瞬間的に目撃したパターンであった。できることなら彼の初期の作品「標的と石膏(1955年)」、「3つの旗(1958年)」、「地図(1963年)」、「潜望鏡—ハート・クレーン(1963年)」や「死体と鏡Ⅱ(1974-75年)」などとの比較ができれば、「薄雪Ⅰ」はもっと身近なものに感じられるのだが。

さて、この授業の目玉となるジョーンズの作品における仕掛けとはなにか。クロスハッチングという連続模様の構成は難しい解釈を必要とせず誰でも親しめるものである。従来のパターンに比べて一段とややこしくなっているが基本は一緒である。画面は3枚の大きなパネルでできており、それぞれのパネルの縦横が3等分され内側の領域が9分割されている。そこで、このパネルの分割領域に記号をつけてみることにした（図8-a）。

まず目につくのは、あ群、い群、う群それぞれが1つの連続した画面になっている点である。明度を高くして薄雪がかかったようになっている箇所が右上に上がっていくように配置されているので、画面の動きを目で追いやす。B2は右斜め上のA4と対応している。同じように、B6がA8に対応している。ここでX、Y、Zという画面を縦に区切る線を設定すると、各線を中心軸に左側2列の領域が右斜め上に上がって右側2列の領域になることが分かる。もう少し見てみると、1・2列と3・4列とか3・4列と5・6列というようにX、Y、Zに限らずどの縦の線を境にしても左右2列の領域は連続的に対応している。もっと見ていくと、あ群、い群、う群は右斜め下に順番に重なる（図8-b）。さらに見ていくと、あ、い、う各群の右端の列である3、6、9をそれぞれ左端の列である1、4、7の左側に水平に移動するとまた連続模様ができる（図8-c）。すると、当然ながらこの新しい組合せでできた各群も斜め下にずれて重なってくる（図8-d）。そして、さらに左右だ

けでなく縦方向にも模様の列が連続的に展開し、画面は無限に増殖していく（図8-e）。もう少ししつこく見ていくと、結局あ、い、う各群の左端の列は右端の列につながっていく。例えば1、2、3→2、3、1→3、1、2→1、2、3というようにどこまでも続く。そして、この順番で列を並べ替えてやると $3 \times 5 = 15$ 領域でできた画面が得られ、この画面を中心に縦横への連続的展開を繰り返すことになる（図8-f）。大変疲れる作業になりそうである。

中村氏はこの作業に関して次のように書いている。

「垂直であれ水平であれ、このように画面が円筒状になることは、2枚あるいは3枚のパネルからなる画面が、いわば始まりも終わりもない無限の画面に転換されうることを意味する。さらに円筒にするまでもなく、鏡像関係にある2枚のパネルがあれば、それを交互に組み合わせることで、無限に広がってゆく平面を想像することもできる。

（中略）その意味でこれらの作品（筆者註：1970年代の一連の作品）には無限の相似の関係がかくされているし、この関係が成立するかぎりにおいて、一見、純粋に抽象的パターンを描いただけのようにみえる作品がたんなる抽象ではなく、ある「あらかじめ定められたシステム」にもとづき、「物体の絵画ではなく、ある観念の絵画であり、純粋に知的な構成」をもつ「秘儀的な」作品であることがわかる（中村 [前掲論文]、p.126。）」

このような難しい解釈は分からなくても、ジョーンズの作品を通じて現代美術と呼ばれているものがなんらかの表現の根拠をもっていることが理解できると思う。彼の作品は生徒たちにとってパズルを解くようにスリリングな教材となるだろう。なお、アメリカの伝統的絵画は軽く流していくことになる。

ここでは生徒全員で美術館に鑑賞しには行けないという前提で指導案を考えてみたいと思う。総授業時数は3時間となる。日頃から鑑賞教育に力が入っていると、話し合い活動がうまく行っているとなら授業はスムーズに行きやすいのだが実際にはなかなかそうは行かないことが多い。そこで、導入として形態が比較的よく分かる作家としてベン・シャーンを扱うことにした。彼も奥の深い作家だがここでは詳しく扱わず表現意図や作品の見方に重点を置く。

| X | Y | | | Z | | | X |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | あ | い | | う | | | |
| A | A | A | A | A | A | A | A |
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 |
| B | B | B | B | B | B | B | B |
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 |
| C | C | C | C | C | C | C | C |
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 |

a: 区画割をする

| | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| A | A | A | A | A | A | A | A | A |
| 3 | 1 | 2 | 4 | 5 | 6 | 8 | 9 | 7 |
| B | B | B | B | B | B | B | B | B |
| 3 | 1 | 2 | 4 | 5 | 6 | 8 | 9 | 7 |
| C | C | C | C | C | C | C | C | C |
| 3 | 1 | 2 | 4 | 5 | 6 | 8 | 9 | 7 |



c: 各群の右1列を左端に置く場合の1つ

| | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|--|---|--|--|
| A | | | A | | | A | | |
| 3 | | | 1 | | | 2 | | |
| A | A | A | B | | | | | |
| 4 | 5 | 6 | 2 | | | | | |
| A | A | A | B | C | | | | |
| 8 | 9 | 7 | 6 | 2 | | | | |
| B | B | B | C | | | | | |
| 8 | 9 | 7 | 6 | | | | | |
| C | C | C | | | | | | |
| 8 | 9 | 7 | | | | | | |

d: cの各群を重ねる

| | | | | | | | | |
|---|---|---|--|--|--|--|--|--|
| A | A | A | | | | | | |
| 3 | 1 | 2 | | | | | | |
| A | A | A | | | | | | |
| 5 | 6 | 4 | | | | | | |
| A | A | A | | | | | | |
| 7 | 8 | 9 | | | | | | |
| B | B | B | | | | | | |
| 7 | 8 | 9 | | | | | | |
| C | C | C | | | | | | |
| 7 | 8 | 9 | | | | | | |

e: 模様列の縦方向への連続的展開

| | | | | | | | | |
|---|---|---|--|--|--|--|--|--|
| A | A | A | | | | | | |
| 1 | 2 | 3 | | | | | | |
| A | A | A | | | | | | |
| 6 | 4 | 5 | | | | | | |
| A | A | A | | | | | | |
| 8 | 9 | 7 | | | | | | |
| B | B | B | | | | | | |
| 8 | 9 | 7 | | | | | | |
| C | C | C | | | | | | |
| 8 | 9 | 7 | | | | | | |

f: 15領域が上下左右に展開

| | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|--|--|--|--|
| A | A | A | | | | | | |
| 1 | 2 | 3 | | | | | | |
| B | A | A | A | | | | | |
| 1 | 4 | 5 | 6 | | | | | |
| C | B | A | A | A | | | | |
| 1 | 4 | 7 | 8 | 9 | | | | |
| C | B | B | B | | | | | |
| 4 | 7 | 8 | 9 | | | | | |
| C | C | C | | | | | | |
| 7 | 8 | 9 | | | | | | |

b: あ群、い群、う群を重ねる

図8 「薄雪I」の構成図

3. 「この絵からなにを感じるだろう」： 弘中小百合

絵画に対する感想とは、その絵からなにかを本当に感じたときに出てくるものだと思う。なにかを感じ取るには、絵画に積極的に接していく必要があると思う。私の場合、絵画を見たときの感動は、作者はなぜこの絵を描いたのだろうか、どんな気持ちで描いたのだろうかといった疑問や、なにかしら不安な感じや悲しみ、喜びや楽しさといった情動を感じることから来ることが多い。視覚的な美しさだけではなく、感情に伝わってくるなにかを感じることも、絵画の1つの楽しみ方だと思う。

この鑑賞の授業では、生徒に、絵画の中に潜む物語性を、感じてほしいと考えた。生徒たちは、比較的抽象画よりも、具象画を好んでいる者が多いので、最初は具象画(図9、図10)を選んだ。また、具象画の方が、絵の中の場所や時間が想像しやすく、入っていきやすいのではないかと考えた。

次に抽象画(図11、図12)を選んだが、どうも抽象画に対しては、「よく分からない」とか「変な絵だ」とかいった先入観を抱き、鑑賞に入っていこうとしない者がいるように思える。抽象画を知能的に理解しようと、なにか説明を欲しているようだが、その前に、色や形から自分なりになにか感じてほしいと思った。

生徒が感想を述べる時、ただ「きれいだ」とか、「分からない」とかいった表面的なものではなく、どこがきれいなのか、なにが分からないのか、どうして好きあるいは嫌いなのかといった、もう1歩突っ込んだものが出てくるようになればいいと思う。それには、生徒への問かけの工夫や、学習プリントによる指導の展開が必要である。

鑑賞の授業によって、絵画への興味が少しでも高まり、自分から積極的に美術館に足を運ぶようになることが望ましいと考える。また、美術館に限らず、テレビや雑誌などで絵画に接することでも、親しみを感じていけると考える。そして、よい絵画に多く接すれば接するほど、絵画のよさや面白さが分かってくるものだと思う。また、描くことが苦手であっても、絵を鑑賞することまで苦手になることはありえない。絵画鑑賞の面白さを味わわせることで、美術にもっと親しみを覚えさせることができるのではないだろうか。

今回の題材は、「アメリカの遺産—絵画の150年」展の絵をもとにしたのだが、この展覧会の絵画を選ぶのだから、アメリカ絵画の歴史を見ていくような題材にした方が、より効果的だったと思う。しかし、今回はあえてそうせずに、絵からいろいろなことを感じ取ること重点を置いてみた。また、美術館での鑑賞を、授業に取り入れることを省いたが、これはやはり実際にはかなり難しいと考えたからである。アメリカ絵画の歴史は、実際に美術館に行かなければ理解しにくいと思ったが、今回は、行かないなりに授業はできると考えた。しかし、授業の中だけで十分に絵画に接するという事は難しく、本物に接するということが、より望ましいということは確かである。もし許されるならば、学校行事の中に、美術館鑑賞を組むなどして、芸術に接する機会を、より多く設定できればいいと思った。

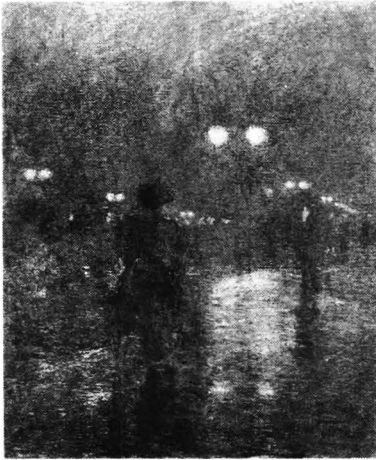


図9 チャイルド・ハッサム「五番街、ノクターン」
1895年頃、油彩／カンヴァス 61.2×51.4cm



図10 国吉康雄「果物を盗む少年」1923年、油彩／
カンヴァス 50.8×76.2cm



図11 マースデン・ハートリー「開戦前のページェ
ント」1914年、油彩／カンヴァス 51.4×
41.3cm

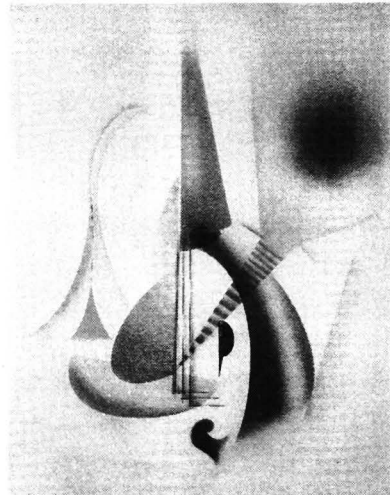


図12 マン・レイ「ジャズ」1919年、テンペラ、イ
ンク／紙 71.1×55.9cm

4. 「アメリカ絵画の変遷と表現方法」： 町田清子

(1) 題材設定

以前中学校に教育実習に行ったときに、「うまく描けない、自分の思うように制作できないから」という理由で美術嫌いを訴える生徒がとても多かった。彼らは概してよい絵とは本物そっくりにうまく描けている絵だと考え、自分は本物そっくりに描けないから「へた」なのだ、だから、美術が嫌いだと言う。彼らは写實的にうまく描かれている絵だけがよい絵なのだという思いに囚われ過ぎているように私には思えた。もっと多彩な表現に接し、自分なりの表現に自信をもつことも必要なのではないだろうか。

そのきっかけにしようと「アメリカの遺産—絵画の150年」展を題材とした鑑賞の授業を考えた。アメリカの現代美術までの流れや表現方法の変化を展覧会として体験することにより、もっと自由な観点で自分の中の美術と向き合えるのではないだろうか。

(2) 授業計画

事前指導を2時間、美術館鑑賞を2時間、事後指導を1時間、計5時間の鑑賞授業を考えた。事前指導でアメリカ美術の現代までの流れ、いろいろな素材による表現等の認識を深めた上で美術館での鑑賞を行う。美術館では、生徒が自分が興味をもった作品に接することができるように指導する。そして、事後指導では、生徒間の意見交換や鑑賞プリントにより新たな発見に導いていきたい。

(3) 鑑賞

事前指導で取り扱う作品は主に抽象表現主義やポップアート等に属するものを考えている。中でも表現の面白さに富むコラージュやアサンブラージュ等の半立体的な作品はぜひ取り扱いたい。ここでは生徒たちにこんな表現もあるのだということを提示し、他にはどんな表現があるのだろうかと興味をもつきっかけにしたい。美術館では自分自身の感情や意図をもって鑑賞し、自分が面白いと思った作品の制作方法を1人1人探求するよう指導したい。美術館で作品に対面することでスライドなどでは見えなかった部分に気づき、より新しい発見ができるのではないだろうか。展覧会を観て、生徒各々が面白いな自分でもやってみたいなと思える表現に出会えたら素晴らしいと思う。もちろん、いろいろな表現に触れてみた結果、やはり自分は写実的なものやってみたいという生徒も出てくると思う。それはそれでいいと思う。自分なりに主体的に美術に接することができるようになること、そのことをこの題材では評価したい。

5. 「アメリカ美術を考える」：山本恵

(1) 題材設定

1992年5月12日から山口県立美術館において約1箇月間開催された「アメリカの遺産—絵画の150年」展。さまざまな時代・作家の120点に及ぶ作品が展示された。それらを一通り見て私はアメリカの美術史とともにアメリカ自体の変遷、それに伴う国民の意識や感情の変化を感じた。そこで、この展覧会を教材として扱う場合、作品を数点に限って鑑賞するよりも、展覧会全体を通じてそこから伝わってくる内容を感じ取ったり、具象から抽象への動きを取り上げていくなどしてさまざまな価値観に触れた方がより有効ではないかと考えた。

(2) 授業計画

ここでは事前指導1時間、美術館での鑑賞2時間、事後指導2時間の計5時間の流れを組んだ。事前指導では、アメリカ美術に対する関心を引き出す。そして、アメリカ美術とはどんなものなのかを考えながら、美術館で鑑賞ができるように導く。事後指導では、展覧会の感想、気に入った作品、自分の中のアメリカ美術観が鑑賞後にどう変化したかなどについて、自由に意見を出し合わせたい。また、現在アメリカで活動を続けている作家を紹介したいと考える。

(3) 鑑賞

授業を行うにあたって、図録を用いる方法もあるがやはり実際に展覧会を見る必要性を感じる。展覧会を見たときと図録を見たときとは、大きさ・色・質感のすべてが大きく違ってくるし、展覧会で受ける印象と図録で受ける印象とは比較にならないほど違う。なによりも美術館では自分の好きな作品の前で画面にじっと見入ることができる。そして、実に自然に“心に残った好きな絵”というものを意識できるようになる。このことは軽視できない事実である。

日本人はフランス美術などのヨーロッパ美術は好きであるが、アメリカ美術がどのようなものを問われてもとっさには応えにくいのではないだろうか。この展覧会はアメリカ美術に触れるよい機会だと思われる。また、美術を国の文化遺産として捉えるだけではなく、そこに住む人々とつなぎ合わせて広い視野で考えてみたい。この展覧会はアメリカ美術だけでなく、私たちの国“日本”について考えを発展させることができる要素をもっていると考え。

(4) 評価

展覧会を見て得る（あるいは、発見する）、アメリカ美術の作品や流れ、特徴などに対する感想は千差万別であろう。感想については唯一の正解はありえず、そもそも美術史の「流れ」の事実以外に、“これが正しい”というものはないのではないか（この「流れ」についても、それが研究者個人の「意見・価値観」によるものである以上、流動的側面があり、なにが正しくてなにが誤っているかを決めるのはナンセンスであるのかも知れない）。この題材における評価の観点は、1.展覧会によっていろいろな価値観を認めながら、自分なりになんらかの意見・感想がもてたか、2.社会と美術のつながりを意識できたかという2点に大別されると考える。

IV 5つの学習指導計画

1. 図画工作科題材構想図（第6学年）： 静屋智

題材構想図

「山口県立美術館からのメッセージ」

— アメリカの遺産—絵画の150年—

第6学年

指導者 静屋 智

| 基本・基礎 | 意識発展の筋道 | 学 習 活 動 | 個の独自性に対応する援助 | |
|--|---|--|---|---------------------|
| <ul style="list-style-type: none"> 美術作品や造形作品に親しみ、それぞれのよさを感じることができること 自分から進んで美術作品からいろいろな発見をしようとする 版画にもいろいろな種類があり、作者の表現意図によって使い分けられていることを理解できること 自分の今までの絵に対する印象と本物を見たときの感じの違い それぞれの美術作品のよさに気づくこと 作者による表現方法の違いが分かること 主体的に美術作品に関わり、いろいろな発見をしようとする態度 | <p>どの絵もすごい</p> <p>表し方がそれぞれ違うようだぞ</p> <p>こんなこと版画でできるんだな</p> <p>本物に出会って確かめてみたい</p> <p>紹介されなかった絵もたくさんあるぞ</p> <p>同じように感じる作品もあるぞ</p> <p>自分の好きな絵はこれだな</p> <p>本物からだとなんか新しい考えがどんどん浮かぶな</p> <p>絵を見るのは楽しいな。また来たいな</p> | <p>4枚の風景画を見て発見したことや好きな部分について話し合う。</p> <p>版画の種類によって違う感じや、作者の表現したかったものについて話し合う。</p> <p>鑑賞カードに自分の感想をまとめる。</p> | <p>○ピアスタット、シリー、ローソン（複製）、児童による風景画を用意し、感想をカードに書かせる。(2)</p> <p>○それぞれの表し方の違いや受ける印象について発表させることによって、自分と友達の見方の違いに気づかせたり、新たな発見をさせたりする。</p> <p>○児童作品を提示することで、自分の表現との比較をしやすくしたり、これからの表現に生かそうとする意欲を高めたり、身の回りの風景に関心をもたせたりしたい。</p> <p>○ジョーンズ、ウォーホル、ローゼンバーグ、トウオンブリー（複製）、児童作品（木版）を用意し、第一印象を聞く。</p> <p>○リトグラフ、シルクスクリーン、銅版、木版といった版画の種類を知らせ、表し方や受ける印象の違いについて話し合わせたい。</p> <p>○教師の版画作品や身の回りの印刷物を示すことによって版画に親近感をもたせ、生活の中にある美について興味関心を抱かせるようにしたい。</p> <p>○事前に感想をもつことで、「本物に出会いたい」という意欲を高めたい。</p> <p>○事前に鑑賞のマナーについて知らせておき、他の鑑賞者の迷惑にならないようにする。(2)</p> <p>○鑑賞の順序は自由とし、できるだけ多くの鑑賞時間を保証したい。</p> <p>○前次で学習した中から1点、その他で好きな作品を1点ほど選んで、言葉や絵で自分の感想・意見をカードに記録させるようにする。</p> <p>○熱心に見入ったり、カードに書き込んだりする姿や、新しいことを発見したつぶやきや、カードに記入した事柄からその子なりのよさを認め、賞賛するとともに価値をつける。</p> <p>○次時の「1枚の絵発表会」の予告をし、鑑賞をし終わった感動や自分の思いをみんなに伝えたい意欲を高める。</p> | <p>1次</p> <p>2次</p> |

| 基本・基礎 | 意識発展の筋道 | 学 習 活 動 | 個の独自性に対応する援助 |
|---|---|---|---|
| ・自分の発見したこと、感想が言えること ・友達の感じ方のよさや、発表の仕方のよさが分かること ・これから進んで美術作品に親しんでいこうとする気持ちをもてること | 友達によって感じ方が違うんだな どれがよくてどれがよくないということはないんだな また美術館で学習したいな | お気に入りの絵を選び、「1枚の絵」発表会」をする。 鑑賞活動を振り返って感想をまとめる。 | 個の独自性に対応する援助 ○一番好きな絵を1点選ばせ、それぞれの絵ごとに感想を求め、友達の感じ方のよさや新たな気づきを発見させたい。 ○教師が発表者の発言内容のよさや、友達が気づいていない美術館での鑑賞態度のよさについて紹介したり、賞賛したりすることによって、そのよさを実感させ広めるとともに、自信につなげたい。 ○カードに題材を通しての感想を書かせ、それぞれの美術作品のもつよさが分かる楽しさ、本物に出会った喜び、自分の見方が変わってきた喜びを実感させ、鑑賞体験がこれからの学習や生活の中で生きるようにしたい。 |

図工ノート（鑑賞）1

附属山口小学校6年 組 no. 名前 ()

アルバート・ビアスタット「風景」

アリス・シリー「白い家」

アーネスト・ローソン「インウッドからのハドソンの眺め」

この時間の感想を書いてください。

図工ノート（鑑賞）2

附属山口小学校6年 組 no. 名前 ()

サイ・トゥオンブリー「古代ローマの記号」

スーザン・ローゼンバーグ「馬上槍試合」

ジャスパー・ジョーンズ「薄雪Ⅰ」

アンディ・ウォーホル「マリリン」

この時間の感想を書いてください。

鑑賞カード

| 芸術家の心と自分の心を対話させよう | |
|--|--|
| ◎美術館でどんなことを見てきたいか、どんなことを知りたいか、書いておこう。 | |
| ◎前の2時間の鑑賞の授業で見た7つの作品の中から1点、この展覧会で一番気に入った作品を1点選んで、感動したこと、分かったこと、発見したこと、もっと知りたいことなど自分の感想を自由に書いて見よう。 | |
| ○授業で見た7つの作品から | ○120点の中で一番気に入った作品 |
| <div style="border: 1px solid black; width: 150px; height: 80px; margin-bottom: 5px;"></div> 《 》作 「 」 | <div style="border: 1px solid black; width: 150px; height: 80px; margin-bottom: 5px;"></div> 《 》作 「 」 |
| ◎全体的な感想をまとめよう。 | |

2. 美術科学習指導案（第1学年）：尾湯正美

美術科学習指導案

第1学年

指導者 尾湯正美

1. 題材 「アメリカ絵画150年とジャスパー・ジョーンズの謎解き」

2. 題材設定の意図

(1) 教材観

私たちの周りにはさまざまなスタイルの美的環境がある。しかし、感覚的には分かったようでも実は一体なが言いたいのか分かりにくいものが多い。現代美術もその1つであろう。この題材においてはベン・シャーンやジャスパー・ジョーンズの作品を中心に考えていきたい。ジョーンズの作品には仕掛けがあるが、この仕掛けはクロスハッチングの連続模様の中に隠されている。一見、無造作に置かれているクロスハッチングだが、この仕掛けをパズルを解くような気持ちで解読させたい。この連続模様のつくり方や考え方をデザイン表現に関連づけて次の教材の伏線としたい。他に取り上げた作家については画風や版の種類や使う材料の違いをポイントとして選んだ。作家の生きた時代や作家自身の個性によって表現はさまざまに異なる。

(2) 生徒観

中学校に入学してきた1年生がそろそろ学校生活に慣れはじめる時期、美術の授業に対して夢が失せてくる者が出てくる。そこで、なんとなく取っつきにくい、不思議な魅力のある(?)現代美術作品、今まで余り見たこともないアメリカの美術との出会いを彼らに仕向ける。なんにでも興味をもつ年頃なので食いつく餌がユニークなほど想像以上の結果を生みそうである。楽しくできる授業を展開していけるだろう。

(3) 指導観

この教材では班で協力しながら現代美術を楽しむことに重点を置きたい。生徒たちが試行錯誤を繰り返しながらクロスハッチングの秘密の1部を解き明かすことで現代美術に興味をもってくれることを願っている。「アメリカの遺産—絵画の150年」展については軽く触れる程度だが、作家たちの生き方などに興味をもてるように指導を工夫したい。

3. 指導目標

- (1) 理解面：ジャスパー・ジョーンズの作品における謎解きを通して現代美術の見方の1つを理解させる。
- (2) 技能面：クロスハッチングの連続模様の組合せをいろいろ見つけさせる。
- (3) 態度面：班での協力のもとにクロスハッチングの仕掛けをパズルを解くような気持ちで解読させる。
作家の生きた時代や作家自身の個性によってさまざまな表現があることや作家の生き方に関心をもたせる。

4. 指導計画（総時間数：3時間）

- 第1次 アメリカ現代美術作家を知ろう。 : 1時間
 第2次 クロスハッチングの仕掛けを解き明かそう。 : 1時間
 第3次 アメリカ絵画150年の歴史の流れを理解しよう。 : 1時間

5. 準備物

教師：参考資料（IPシート、作品コピー、スライドなど）、OHP、スライド映写機、ワークシート、ハサミ、セロテープ
 生徒：資料集、教科書、筆記用具、クロッキー帳、鑑賞カード、ハサミ、セロテープ

6. 指導過程

| 時間 | 主な学習活動と内容 | 指導上の留意点 |
|-----|---|--|
| 1時間 | <p>導入</p> <p>学習班の形態で授業を受ける。</p> <p>作品を鑑賞し気がついたことなどを発表する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○寂しい感じ ○なにかを訴えようとしている ○油絵ではないようだ ○テンペラかな ○閉じ込められた息苦しさ ○単純な構成のようだがよく見るとかなり複雑そう ○人生を厳しく見ている | <p>○ベン・シャーンの「外を見ている内側」を鑑賞して鑑賞の仕方を学ばせる。</p> <p>○班で協力して考えをまとめさせる。</p> <p>作者はなにを表現しようとしているのか 構成の仕方について 画材の種類はなにか 作者はどんな人だろうか 時代はいつ頃なのか</p> <p>○感じたことや気がついたことを自由に発表することの大切さを理解させる。</p> |
| 1時間 | <p>展開</p> <p>アメリカの現代美術作家の作品を鑑賞して話合をする。</p> <p>スーザン・ローゼンバーグ「馬上槍試合」 アンディ・ウォーホル「マリリン」 ジョージ・シーガル「椅子に座る女」 ジャスパー・ジョーンズ「薄雪Ⅰ」</p> <p>木版・銅版・リトグラフ・シルクスクリーンといった種類が違う各版画の感じや作者の表現したいものはなんなのだろうかを話し合い発表する。</p> <p>ジャスパー・ジョーンズの「薄雪Ⅰ」について話し合い発表する。</p> <p>クロスハッチングの謎解きに入る。</p> <p>「薄雪Ⅰ」を印刷したプリントをハサミで切って配置し直したりサインペンで着色したりして自分なりに考える。</p> | <p>○自分と友達の感じ方の違いに気づかせ、いろいろな感じ方があることを理解させる。</p> <p>○鑑賞用プリントを用意しておき、感想などを書かせ発表させる。</p> <p>木版、リトグラフ シルクスクリーン 石膏、木、ペンキ シルクスクリーン、製版段階で新聞の切り抜きを使用</p> <p>○版種の違いによって表現方法や表現意図が違ってくることを理解させる。</p> <p>○クロスハッチングについて説明することによって興味をもたせる。</p> <p>○画面の分割の意味を考えさせる。</p> <p>○ジャスパー・ジョーンズの他の作品も紹介する。</p> |
| 1時間 | <p>「アメリカの遺産—絵画の150年」展の他の作家の作品を鑑賞し気がついたことなどを発表する。</p> <p>鑑賞用プリントに記入する。</p> <p>└さまざまな感じ方がある。</p> <p>まとめ</p> <p>現代美術にはさまざまな発想の方法があることを知る。</p> <p>わずか150年の中でこれだけの大変革があったことを知る。</p> | <p>○アルバート・ビアスタット、アリス・シリー、アーネスト・ローソンなどについて。</p> <p>└生徒の発達過程や興味・性格などによって見方が違うことを大切にする。</p> <p>○時代や作家によって描き方がさまざまに違うことを理解させる</p> <p>└それぞれのよさを探ることが大切。</p> <p>○現代美術は分からないという既成観念を捨てさせる。</p> <p>○絶えず人間は新しいものに挑戦していることを考えさせる。</p> |

美術科学習指導案

第1学年

指導者 弘 中 小百合

1.題材 「この絵からなにを感じるだろう」

2.題材設定の理由

(1)教材観

私たちはいろいろな場面で絵画に接する機会がある。あえて美術館に足を運ばなくても、教科書や雑誌やテレビなどを通じて、目にする機会は多くある。しかし、せっかくだら絵画を目にしても、気にも留めず、ただ見流してしまうことが多いのではないだろうか。絵画に興味のある者は、よく美術館に出かけて行って、絵画鑑賞を楽しんでいるようだ。しかし、そういう者は少なく、さほど興味をもたない者は、あえて出かけて行って見ることはしないようだ。絵画というのは、やはり本物に接してこそ本当のすばらしさを感じ取れるものなのであるが、残念ながら、本物の絵画に接しようという意欲を失ってしまっている者が多くいる。そこで、絵画鑑賞というものを固く考えずに、もっと楽な気持ちで、自然になにかが感じられるようになれば、少しずつ絵画に興味をもってくるのではないかと考えた。ここでは生徒たちの自由な連想を促し、絵画からなににかを感じることに楽しさを見つけさせたい。自分なりに思うことを言い合うことで、絵画がより親しみ深いものになっていくだろう。こうして、興味をもたせ、より多くの絵画に接することでそのすばらしさを感じる心を養っていききたい。

(2)生徒観

この時期の生徒は、より本物に近い絵に強い関心を示している。自分も本物のように描きたいが、うまく描けない、それで、リアルな絵に憧れ、そんな絵を好む傾向にある。しかし、絵画のよさは、そこにばかりあるわけではない。もっと別な見方で絵画に接することで、鑑賞の面白さを知ることも必要であると考えた。そこで、抽象画を交えたいくつかの絵画を選び、感じることを自由に述べることで、今までとは違った見方をすることができるのではないだろうか。

(3)指導観

この題材ではまず、具象絵画から2点選んで、それぞれの感想を述べさせる。その際、その絵の描かれている場所や時間や季節などを問い、生徒の想像力を駆り立てていく。そして、2つの絵を比較して、違いを述べながら、それぞれの特徴を感じ取らせる。次に抽象絵画から2点選んで、この場合もそれぞれの感想を述べさせる。この際は、もっと感覚的な問いかけをする。こうすることで、理解しにくい抽象画にも親しみを感じさせたい。

3.指導目標

- (1) 絵画により深く接することで、今まで気づかなかった面白さを感じ取ることができるようになる。
- (2) 絵画に対する難しいイメージを取り去り、気軽に接していこうとする態度を身につけさせる。
- (3) いろいろな表現方法で描かれた絵画があり、それぞれに独自なよさがあるということを理解させる。

4.指導計画（総時間数：2時間）

第1次 具象絵画から2点選んで、見た感想を述べる。 : 1時間

第2次 抽象絵画から2点選んで、見た感想を述べる。 : 1時間

5.準備物

教師：複製画各1枚（チャイルド・ハッサム「五番街、ノクターン」、国吉康雄「果物を盗む少年」、マースデン・ハートリー「開戦前のページェント」、マン・レイ「ジャズ」）、図録1冊、学習プリント

生徒：筆記用具

6.指導の流れ

| 時間 | 主な学習活動と内容 | 指導上の留意点 |
|-----|--|--|
| 1時間 | (1) 2点の具象絵画を鑑賞する。 (2) 2点の絵から感じることをプリントに書き留める。 | <ul style="list-style-type: none"> ● 複製画を前に貼って見せる。 ● 図録を回して、2つの絵をはっきりと見せる。 ● 学習プリントを配り、それに書き込ませる。 ● 絵の中の場所や時間や季節などを問い、絵の中の物語性を捉えさせる。 ● 絵の題名は告げずに、自分なりの題名をつけさせてみる。 ● 何人かに発表させ、他人の意見を聞かせる。 |

| 時間 | 主な学習活動と内容 | 指導上の留意点 |
|-----|--|--|
| 1時間 | <p>(3) 2点の抽象絵画を鑑賞する。</p> <p>(4) 2点の絵から感じることをプリントに書き留める。</p> <p>(5) 4点のうち特に気に入ったものを選び、感想をプリントにまとめる。</p> | <ul style="list-style-type: none"> 複製画を前に貼って見せる。 図録を回して、2つの絵をはっきりと見せる。 再び学習プリントを配り、それに書き込ませる。 2つの絵それぞれから、感覚的に感じることを問う。 それぞれから、作者の気持ちも想像させる。 抽象的な画面から、具体的なものを連想させる。 2つの絵の題名を考えさせる。 何人かに発表させ、他人の意見を聞かせる。 最後にすべての絵の題名を教えて、自分のものと比べさせる。 今までの感想をまとめながら、どうして気に入ったのか、特にどんなところが気に入ったのかを書かせる。 最後の感想のプリントは、冊子にして皆に配る。 |

学習プリント1（具象絵画）

| | |
|---------------------------|--------------------|
| チャイルド・ハッサム 「五番街、ノクターン」 | 国吉康雄 「果物を盗む少年」 |
| 「 _____ 」 | 「 _____ 」 |
| ①時間や季節はいつだろう | ①時間や季節はいつだろう |
| | |
| ②どんな場面なのだろう | ②どんな場面なのだろう |
| | |
| ③作者はどんな気持ちで描いたのだろう | ③作者はどんな気持ちで描いたのだろう |
| | |
| ④自分で題名をつけてみよう | ④自分で題名をつけてみよう |
| | |
| 1年組 no. 名前 _____ | |

学習プリント2（抽象絵画）

| | |
|-----------------------------|--------------------|
| マースデン・ハートリー 「開戦前のページェント」 | マン・レイ 「ジャズ」 |
| 「 _____ 」 | 「 _____ 」 |
| ①どんな感じがする | ①どんな感じがする |
| | |
| ②なにに見える？ | ②なにに見える？ |
| | |
| ③作者はどんな気持ちで描いたのだろう | ③作者はどんな気持ちで描いたのだろう |
| | |
| ④自分で題名をつけてみよう | ④自分で題名をつけてみよう |
| | |
| 1年組 no. 名前 _____ | |

学習プリント3(感想文)

- 一番気に入った作品はどれですか。
- 一番気に入った作品の感想を書こう。
- この作品に物語をつけたり、聞こえてきそうな音楽を考えたりしよう。

1年 組 no. 名前 _____

4. 美術科学習指導案(第1学年): 町田清子

美術科学習指導案

第1学年

指導者 町田清子

1. 題材 「アメリカ絵画の変遷と表現方法」

2. 題材設定の意図

(1) 教材観

美術科の性格の中に「個性の開発・伸長を図る」という重要な側面がある。美術科では、1つの正答を求めるような活動ではなく、十人十色の個性的な活動を尊重するものである。それは、1人1人の個性の違いやよさを認め合うことなのではないだろうか。しかし、現状では、生徒はなかなか自分の表現に自信をもつことができているように感じた。本題材では「アメリカの遺産—絵画の150年」展の鑑賞を通じて、自分の中の「美の表現」に対する思いに向き合ってほしいと考えた。

「アメリカの遺産—絵画の150年」展にはハドソン・リヴェア派、写実絵画、モダニズム、リアリズム、具象絵画、抽象表現主義、ポップ・アート等のアメリカ美術の現代までのいろんな表現による作品がある。事前指導では、その中の作品を数点取り上げ、アメリカの絵画の変遷を考えたい。特に抽象表現主義やポップ・アート等の表現の面白さが味わえるもの、今までの授業の中で出会ったことのないような表現(コラージュやアサンブラージュ等)を提示することで、生徒の興味に働きかけ、展覧会場での主体的な鑑賞につなげたい。「このような表現が好きだ」と言う生徒もいるであろうし、「あの作品が好きだ」と言う生徒もいるであろう。自分の感じた好みや美しさ(面白さ)等を、適切な言葉で伝え合うことは新しい発見を生み、お互いの違いやよさを認め合うきっかけとなるのではないだろうか。

(2) 生徒観

第2学年は感性が最も伸び、深まる年頃にある。また、個人差も顕著になる時期である。この時期に多彩な表現に出会うことで生徒の美しさやよさを深く感じ取る能力が高められ、感性が一層伸びるのではないだろうか。

生徒は今までの学習の過程において絵画や版画、彫刻、デザインの表現活動を体験してきた。その経験を踏まえることで、自分が面白く感じた表現がどのように制作されたのか探求できると考えた。

(3) 指導観

この鑑賞の指導においては、美術史的な知的理解は求めず、1人1人の生徒が主体的に(自分自身の感情や意図をもって)鑑賞を行い、いろいろな表現があることに気づき、自分なりに表現の面白さに出会えたかという過程を大事にしたい。また、その表現のどこに美しさあるいは面白さを感じたのか、作者はどのような素材、表現方法を用いているかを明確に意識させるようにし、次の創作へとつなげていけるように促したい。

3. 指導目標

- (1) いろいろな表現方法があることを理解し、その美しさや面白さを感じることができるようになる。
- (2) 主体的に鑑賞を行い、自分なりの意見をもつことができるようになる。
- (3) 展覧会を通じて自分の表現を深めることができるようになる。

4. 指導計画（総時間数：5時間）

- 第1次 アメリカ美術の変遷、抽象表現主義などの表現方法について学習する。 : 2時間
 第2次 美術館にて作品鑑賞。 : 2時間
 第3次 鑑賞をもとに自分の表現を考えよう。 : 1時間

5. 準備物

教師：スライド、スライド映写機、鑑賞プリント、図録、複製画（エドワード・キーンホルツ「ソーディー[1971年、ミクスト・メディア]」、ジョージ・シーガル「椅子に座る女[1970年、石膏、木、ペンキ]」、R.B.キタイ「フランス的題材[1970年、印刷物、コラージュ]」、アレクシス・スミス「ヴェヌスマスター[1988年、ミクスト・メディア]」）

生徒：筆記用具

6. 指導の流れ

| 時間 | 主な学習活動と内容 | 指導上の留意点 |
|-----|--|---|
| 1時間 | ①スライドによりアメリカ美術の現代までの流れを学習する。 | ● スライドでの鑑賞を通じてアメリカの絵画がどのように変化してきたか考えさせる。 ● 社会的背景等を提示し、美術の表現は時代や人々の思想を反映しながら変遷してきたことを理解させる。 |
| 1時間 | ②自分の感じたこと、考えたことを鑑賞プリントに書き留める。 ③抽象表現主義やポップ・アート等の作品をスライド・複製画により鑑賞する。 | ● 自分はどの表現を好ましく思ったかを明確にさせ、新しく自己を考えるきっかけを得させる。 ● 前時の授業を踏まえた上で現代の表現を考えさせる。 ● 現代絵画やコラージュやアサンブラージュ等の作品はどのような方法や素材を用いて制作されているか考えさせる。 |
| 2時間 | ④自分の感じたこと、考えたことを鑑賞プリントに書き留める。 ⑤美術館で作品を主体的に鑑賞し、表現方法の多彩さを味わう。 ⑥自分が面白いと思った表現について鑑賞プリントに書き留める。 | ● ここで提示したもの以外についても考えさせ、展覧会への興味関心が高まるように導く。 ● いろんな表現による作品があることを展覧会を通して実感させる。 ● スライドなどでは見えなかった部分に気づかせ、より新しい表現を発見させる。 |
| 1時間 | ⑦鑑賞プリントをもとに自分が感じたことを深める。 ⑧鑑賞活動を振り返って感想をまとめ、自分の表現を考える。 | ● 自由に自分が興味をもった作品を鑑賞させ、それほどの方法で表現されているか、素材はなにを用いているかを探索させる。 ● 自分の感じた面白さや美しさを明瞭化させ、相互に意見交換を行わせることで、さらに考えを深め発展させる。 ● 自分なりに主体的に美術に接することができるようになる。 |

5. 美術科学習指導案（第2学年）： 山本恵

美術科学習指導案

第2学年

指導者 山本 恵

1. 題材 「アメリカ美術を考える」

2. 題材設定の意図

(1) 教材観

「アメリカの遺産—絵画の150年」展は開拓期から現代にまで及ぶ多様な作品からなる展覧会である。ハドソン・リヴァー派に始まり、印象派、キュビズム、モダニズム、ポップ・アートなどさまざまな作風が展開し、生徒が自分の好みに合うものと出会う可能性は高い。美術科題材として展覧会を取り上げることでいろいろな価値観に触れることができる。そして、アメリカ美術の変遷を感じることができる。

美術館での鑑賞では、教師からの押しつけではない生徒同志の自由な意見交換や、自分のペースに合った活動ができる。また、この機会を利用して美術館など公の施設を利用する際の望ましい態度を身につけさせることができる。作品に描かれる内容から、その時代に想いを馳せることができる。アメリカという1つの国の変遷を見ることで、自分たちの国「日本」を今までとは違った角度から眺めることができる。無の状態を切り開いて今日のアメリカを築いた人間の可能性を理解させることで、教科を越えたプラスαを生徒に残すことができる。

(2) 生徒観

この学年の生徒は美術館を校区にもっているが、全体的に見ると積極的に美術館を利用している者は少ない。これまでの創作活動を通じて各々の作品の好みができかけているが、全般にリアルな絵画に対する憧れが強く、特に絵画の制作の場では萎縮が見られる。アメリカの美術についての知識はほとんどないが、国民についてはなんらかのイメージをもっている。

(3) 指導観

展覧会鑑賞の前に、さまざまなタイプの作品を提示しアメリカ美術について想像させることにより鑑賞の視点を定めさせる。通史的に作品鑑賞をさせることにより、美術と人間の関わりに関心をもたせる。感想を出し合わせることで、互いの意見を尊重しさまざまな価値観を認めることができるようにさせる。

3. 指導目標

(1) 理解面：美術はさまざまな過程を経て、社会を反映しながら展開し今日に至っていることを理解させる。

(2) 態度面：1つに偏らない複数の価値観を認め味わわせる。

4. 指導計画（総時間数：5時間）

第1次 アメリカ美術を鑑賞する。 : 1時間

第2次 美術館で鑑賞する。 : 2時間

第3次 感想を発表し合い、社会との関わりを考える。 : 2時間

5. 本時の学習指導

〈第1次：1時間〉

(1) 主眼

絵画作品を鑑賞することにより、アメリカ美術を想像することができるようになる。

(2) 準備物

教師：作品スライド、スライド映写機、ワークシート

生徒：筆記用具

(3) 指導過程（T＝教師の発問や指導上のポイント、て＝でだて、提＝提示資料）

| 学習過程・学習内容 | 教師のはたらきかけ | 評価の観点 |
|--|---|----------------------------|
| 意識化 1. アメリカのイメージについて話し合う 焦点化 | T1. アメリカと言われるとなにを想像するか て) イメージカラー、イメージキャラクターを 考えさせる | ● アメリカについて関心 をもつことができたか |
| 具体的 2. アメリカ美術について想像する 思考 ● 国民性から ● “アメリカ”のイメージから | T2. アメリカ美術はどのようなものであるか 提) さまざまな作風の絵画作品（スライド） て) 自分のイメージに近いスライドを選ばせる | ● 自分なりの予想をする ことができたか |
| 系統・ 3. 予想とその理由を書き留める 一般化 | T3. 展覧会の予想を書こう 提) ワークシート て) 班で話し合わせる | ● 自分の意見をまとめる ことができたか |
| 後の学習美術館で「アメリカの遺産—絵画の150年」展を鑑賞する | | |

〈第2次：2時間〉

(1) 主眼

展覧会を味わい、“好きな作品”をもつことができるようになる。

(2) 準備物

生徒：ワークシート、筆記用具

(3) 指導過程

| 学習過程・学習内容 | 教師のはたらきかけ | 評価の観点 |
|---|---|------------------------------|
| 意識化 1. 鑑賞にあたっての注意 焦点化 ● マナー ● 鑑賞の視点 | T1. なにに着眼して展覧会を見るか て) 生徒に発表させる | ● 鑑賞の視点を確認し、意 欲をもつことができたか |
| 具体的 2. 鑑賞 思考 | T2. マナーに気をつけながら、視点に沿って作 品を見よう て) 各々自由に鑑賞させる | ● じっくりと味わい、楽 しむことができたか |

| 学習過程・学習内容 | 教師のはたらきかけ | 評価の観点 |
|---|---|--|
| 系統・3.意見の交換をする 一般化 <ul style="list-style-type: none"> 好きな作品 その理由 展覧会を見た後のアメリカ美術観 | T3. 展覧会を見て感じたことを話し合おう て) 生徒間で自由に話し合わせる | <ul style="list-style-type: none"> 友人に自分の意見を話すことができたか |
| 後の学習展覧会について話し合う | | |

〈第3次：2時間〉

(1) 主眼

互いの意見を聴くことにより、さまざまな価値観があることを認め、鑑賞の視野を広げることができるようになる。

(2) 準備物

教師：展覧会の作品スライド、現在アメリカで活躍する作家の作品スライド、スライド映写機、図録

生徒：ワークシート、筆記用具

(3) 指導過程

| 学習過程・学習内容 | 教師のはたらきかけ | 評価の観点 |
|--|--|---|
| 意識化・1. “好きな作品”を発表する 焦点化 <ul style="list-style-type: none"> いいと思った理由 | T1. 展覧会では“好きな作品”が見つかったか 提) 展覧会の作品スライド て) 展覧会の後、友人とどんなことを話したか 思い出させる | <ul style="list-style-type: none"> 自分の好きな作品について意見を述べることができたか |
| 具体的・2. 感想を話し合う 思考 | T2. 全体の流れを通じて思ったことはあるか て) 作品を1つ挙げさせ、それを展覧会全体の中に置いて考えさせる | <ul style="list-style-type: none"> より深い考察をすることができたか |
| 系統・ 一般化 | T3. その作品を制作したとき、作家はどんな気持ちでいたのだろうか て) 3つの作品に限って考察させる | <ul style="list-style-type: none"> 美術と人間の関わりについて考えることができたか |
| 休 息 時 間 | | |
| 意識化・1. 展覧会の感想を書く 焦点化 <ul style="list-style-type: none"> ワークシートに記入 | T1. 展覧会の感想を書こう て) <ul style="list-style-type: none"> 図録を回す 感想が展覧会の鑑賞の前後でどう異なったかなどに注目させる | <ul style="list-style-type: none"> 自分の意見をまとめることができたか |
| 具体的・2. アメリカ作家の紹介 思考 <ul style="list-style-type: none"> エリザベス・マレーの「ワンダフル・ワールド」など | T2. 現在のアメリカの作家について知っているか 提) 現在アメリカで活躍する作家の作品スライド | <ul style="list-style-type: none"> 想いを発展させることができたか |
| 系統・ 一般化 3. 授業のまとめ <ul style="list-style-type: none"> 作品 歴史的観点から | T3. これからどんな作品を見てみたいか | <ul style="list-style-type: none"> 新たな鑑賞意欲をもつことができたか |

V 総括

本稿の主題は鑑賞題材の開発だが、それをもとに授業を行うことの方が実質的価値が大きい。ただ、それには学校側・美術館側双方の理解と協力が必要である。

今回の試みは、静屋が勤務校である附属山口小学校で自作の学習指導案に基づき鑑賞授業を行うことを提案したことで進展した。幸い田中稔穂校長・安村俊輔副校長により実施の許諾が得られ、三原裕人・吉鶴修両教諭が担任学級で授業を行う機会を提供して下さった。また、足立明男副館長がこの活動を評価して下さり、児童の団体鑑賞や活動場面の録画・撮影等、多くの便宜を図って下さったことで、美術館での鑑賞授業が実現の運びとなった。

活動を理解して下さった田中校長先生・安村副校長先生、美術館への児童の引率や展覧会場での監督等、指導に協力して下さった三原先生・吉鶴先生、活動を全面的に支援して下さった足立先生に、そして、附属山口小学校と山口県立美術館に、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

授業では活動を計画的・組織的に進めるために、「鑑賞教育プロジェクト」を組んだ。プロジェクトと授業実践の詳細については、第15回美術科教育学会・研究発表で岡田・静屋が共同発表し、後日、その内容を論文にまとめて学会誌に寄稿する予定である。発表題目は「鑑賞教育プロジェクト（「美術科教育特論演習Ⅱ」課題）——「アメリカの遺産—絵画の150年」展（山口県立美術館）の題材化」である。

足立副館長からは、「総合的な鑑賞教育の実践的研究に取り組んだ例は珍しい。大いに美術館を役立ててほしい（「実物で鑑賞授業—事前学習で知識」[『朝日新聞・山口版1992年6月20日付』]）」という激励のコメントをいただいた。附属山口小学校の先生方の協力、足立副館長を初めとする美術館側の学校教育への理解があって、初めてプロジェクトが具体化できた。今回の活動を通じて、学校教育と美術館活動との連携が鑑賞教育の充実・発展に不可欠であり、さらに大学教育にはそうした活動の基盤づくりを行う責務があることを痛感した。

図録によれば、「アメリカの遺産—絵画の150年」展は、オハイオ州の美術館・企業・個人所蔵家のコレクションを集めて組織された展覧会である。そこで、もし機会があれば、本稿に掲げた学習指導案をもとに当地での鑑賞授業を実現させたい。また、今回の経験を基に、今後は山口県立美術館を初め、地元の施設・画廊・個人所蔵家等のコレクションをもとに独自の鑑賞題材を開発し、地域に根差した鑑賞教育を地道に展開していきたいと思う。